



Title	＜紹介＞福田安典著『平賀源内の研究 大坂篇：源内と上方学界』
Author(s)	有澤，知世
Citation	語文. 2013, 100-101, p. 152-153
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70919
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

紹介

福田安典著『平賀源内の研究 大坂篇―源内と上方学界―』

有澤 知世

本書は、福田安典氏の平賀源内に関する論文を集成・増補し、従来の源内研究を大幅に書き換えた画期的な研究書である。従来の平賀源内については、三十歳過ぎから五十二歳までの、江戸での印象的な事跡を中心に論じられることが多い。しかし本書は、源内が三十歳までを過ごした讃岐、上方時代に焦点を当てており、源内という人物を根本から論じるための研究書である。

I 「風来山人の誕生」では、源内が「白石」姓を改め「平賀」姓を名乗る経緯についての再検討から始まり、離郷前後の俳諧活動、上方行き、江戸での出版活動をたどっている。

特に二、三章では、従来あまり論じられることのなかった、讃岐の俳人「李山」としての源内の姿を描き、志度俳壇との強い関係に注目している。一般的に、源内は長崎遊学を経て江戸行きを決心し、宝暦四年に家督を妹婿に譲ったとして説かれるが、その実態は不明瞭な点が多い。第二章「宝暦三年の平賀源内―白石から平賀、そして離郷―」では、家督を譲ったとされる年の直前にあたる宝暦三年が、源内の俳諧活動の最盛期であることに着目する。本書では、『平賀源内全集補遺二』に収められる、性格が不明瞭であった宝暦三年短文を、「新たな志度俳壇を起こすべく起草されたもの」（四一頁）と位置づけ、「この年における源内の精

力的な俳壇結成の事情から成立したのではないだろうか」（同頁）としている。また、源内が大坂の椎本流俳諧と自身との関係を述べた、他の年次不詳の短文について検討し、源内の伝記中不明瞭である宝暦二年以前に、大坂での俳諧修行期間があったことを想定する。

II 「戸田旭山という師匠」では、源内が江戸へ出る以前の、上方時代を辿る。源内の上方時代は、彼の基礎となる部分をつくった当時の上方学界と共に論じられており、特に源内の「師匠」である戸田旭山とその周辺について詳しく述べられている。

旭山とは、『近世畸人伝』にも紹介される大坂の本草学者で、医者を生業とした人物である。第四節「旭山の薬品会」では、彼の代表的な事績である宝暦十年の薬品会と、その記録である『文会録』に注目する。この会には、都賀庭鐘や木村兼葭堂といった、当時一流の上方文人達が参加していること、また、伊丹酒造家との経済的なかわりについて指摘されており、旭山の薬品会が、いかに当時の上方学問・文化界において大きな存在感を示したかについて述べられる。

さらに、旭山が敵視した京都堀川の医師、香川修庵に焦点が当てられる。旭山は修庵を強く意識しており、旭山の弟子である源内もまた、修庵への関心が高い。そのような緊張関係の中、修庵の高弟であった都賀庭鐘が旭山の薬品会に出品、参加し、学識を闘わせているという興味深い事実について語られている。同時代を生きながら、並べて論じられることのない源内と庭鐘であるが、

福田氏が「医学や本草学から見た場合は、両者は互いを意識する理由がむしろありすぎるほどである」(一六九頁)と述べるように、彼らは上方の学問を介してつながっているのである。

Ⅲ「平賀源内の文芸風景」は、上方初期洒落本である『本草妓要』が、何を素材にしているのかという問いから始まる。従来『本草妓要』は、清の本草書『増訂本草備要』のもじりであることが指摘されていたが、序以降の凡例や附図、本文は『本草備要』のもじりではない。本書では、『本草妓要』本文の再検討を通して、実は香川修庵の代表的な著書『一本堂葉選』『一本堂行余医言』が下敷きとなっていることを明らかにしている。そして『本草妓要』の作者と読者が、修庵の門人であったことを指摘し、宝暦期の医学書生の間で、医学書を下敷きにした戯作が流行していたことを述べる。

その上で、第二章「平賀源内『天狗髑髏鑑定縁起』論—本草学と戯作—」で、源内が風来山人の名で出版した戯作『天狗髑髏鑑定縁起』の重要な素材が、古義堂や懷徳堂といった上方学界で注目された获生徂徠『天狗説』であること、また、『天狗説』をめぐる伊藤東涯や松岡恕庵の動向などを当て込んで制作されていることを明らかにしながら、「本草学者として生きた源内の姿が濃厚に見られるという点で注目すべき作品である」(二一八頁)と再評価する。また、第四章「平賀源内と『名物六帖』」では、古義堂から誕生した辞書『名物六帖』を、源内がいかに利用しているかについて述べられている。中村幸彦氏の先行研究を踏まえた

調査により、源内の文芸作品における『名物六帖』の利用箇所を指摘し、その特徴について、「術学的な彼一流の文体をなす一要素でもあった」(二六四頁)と述べ、「今後の源内の文体論を考えるとときには考慮されるべきであろう」(二六六頁)と問題提起を行っている。

本章では、近世文学研究に医学・本草学からの視点を導入することによって、当時の学問と文芸活動との密接な関わりを具体的に明らかにし、源内戯作にあらわれた、上方学界への意識を照射しているのである。

Ⅳ「おわりに—平賀源内とその時代—」では、再び庭鐘に焦点が置かれ、源内との対比によって、彼らが生きた時代を概観する。「庭鐘と源内とは因縁あさからぬ関係である」(二八〇頁)とされるように、両者は同時代に医学・本草学・戯作という同じ土俵に立ちながら、それぞれ香川修庵・戸田旭山という対照的な師を選び、生涯に渡って互いに意識し合っていくことになる。一見没交渉に見える両者は、実は意外にも近い距離にあり、二人の生きた上方の文化圏を明らかにすることで、新たな源内像を論じている。本書に収められるのは、表面からはうかがい知ることのできない、膨大な医学書調査の上に成り立つ研究である。福田氏自ら「上方学界と絡めた新たな源内論が待たれている」(二九八頁)とされるように、本書に続く福田氏のさらなるご研究が期待される。

(ぺりかん社、二〇一三年一月、三二二頁、五、八〇〇円)

(ありさわ・ともよ 本学大学院博士前期課程)